

カルテットの ある風景

短編

III

Lento assai, cantante e tranquillo

p cresc. *sotto voce*
p *cresc.*
f
p cresc.

String Quartet No. 16 in F major, Op. 135

YAMANAKA TOOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

カルテットのある
風景

山中與隆

目次

カルテットの
ある風景

1

編者あとがき

57

カルテットの ある風景

作 山中與隆

「練習番号『P』から少しゆっくりやってみようか」とチエロの鎚田氏。みなは『そうだね』というように頷く。

「じゃ、アウフタクトから」

「1と2と」

ファースト・ヴァイオリンの石山夫人からテンポの指示が出た。これまでの倍くらい遅いテンポだ。四人ともしつかりした音で弾き、問題の箇所之音形が明瞭になる。

「こうなっているんだ」

鎚田氏は独り言のように呟いた。石山夫人は鎚田氏の方をちらつと見てから、

「じゃ、もう少しテンポを上げますよ。1と2」
まだこれまでのテンポより相当ゆっくりだ。これも
全員クリア。

「じゃ、テンポに戻しますね。1、2」
石山夫人のテンポ指示が急に早くなった。やはりこ
のテンポではうまくいかない。

「この速さじゃ、指が回らない」
セカンド・ヴァイオリンの鎚田夫人が音を上げる。

「私もこの速さはじやアウトだね」

ビオラの石山氏も同調する。

アレグロで始まったこの第四楽章は、おしまいの部分でプレステイツシモという最大級の速度で全曲を締めくくるように書かれているのだ。CDなどで聞くとプロの連中は当然のことながら、初めのアレグロも相当速い上に、プレステイツシモではさらに五割り増しかとも思える速度で一糸乱れず弾ききつ

て圧倒的な緊張感の中で曲を閉じる。

ところがいま彼らが練習しているのは、最後の部分をやつとCDの最初のアレグロくらいのテンポである。それでも上手くないのだ。

「まあ、少しずつ練習していきましようよ」と石山夫人。そして、

「とりあえずちよつとテンポを落として、プレステイツシモからお終いまでやっておきましようか」

『ちよつと遅め』がだいたい遅めだったが、『P』のところはやはりすつきりしなかった。しかし今日のところはこの曲の練習は終わることになった。

鎚田夫人と石山氏は悔しそうにそれぞれ『P』の部の譜面を弾いてみている。しかし、その場でちよつとさらつたくらいで解決するようなものではなかった。

「基本的に出来ていないことだから、いまさら練習

しても出来るようにならんよ」

石山氏はため息をつきながらボソボソ独り言である。
「映子さんは、私たちより遥かにたくさん難しいところがあるのに軽々と弾くんだからすごいよね」

鎚田夫人がうらやましそうにいった。そういわれた石山夫人は、とんでもないという風に手を振りながら、

「軽々なんかじゃあるもんですか。音はいっぱいは

ずすし、音程なんかめちやめちや・・・必死で弾いてるんですよ。だから私も正確なテンポで出来ていないの。それであなたたちも弾きにくいのよね」

「まあ、またやりましょう」

と石山氏が締めくくった。

「ところで、少し気分がよくなるようなのをやっつてから終わりにしませんか」

と提案したのは鎚田氏だった。

「そうしましょう。何がいいですかね」と石山夫人。

「《カイザー》は？」

と提案したのは石山氏だ。

「いいですね」

鎚田夫人は賛成した。

「いいけど、それも難しいんだよな。気分がよくな

るかなあ」

鎚田氏は、反対でもないが賛成でもないようなあいまいな態度だ。

「いやいや、気楽にさつと通しましょう」と石山氏。

「いいですよ」

鎚田氏のひと声で《皇帝（カイザー）》に決まった。たくさんの室内楽の楽譜が並んでいる棚から、ハイ

ドンの有名な弦楽四重奏曲が何曲も収められている版を探し出して、それぞれのパートに配ったのは、この家の主であるビオラの石山氏である。

石山氏の楽譜のコレクションは相当なもので、音楽好きが大勢集まったときに『あれやってみよう』『これやってみよう』という声に答えられないことはまずない。とはいっても、ふつうこうしたアマチュアのメンバーがやってみようという曲は限られて

いる。それは曲を少ししか知らないからではない。知っている曲の数ではちよつとしたプロにも負けることはない。ただ自分たちの腕に適う曲が限られているといふことなのである。

たいていのアマチュアの腕に適う曲といえは、ハイドンかモーツァルトかベートーベンで、ベートーベンも初期のものというのが通り相場である。ベートーベンの中期、後期の傑作群となると、よほど覚

悟してかからないと音楽を楽しむところまでいかない。それ以外ではドヴォルザークの《アメリカ》や《死と乙女》などシューベルトの一部の曲くらいであらうか。ちよつと進んだメンバーたちは、たまにブラームスを弾いたりもする。

出来るものなら弾いてみたいという曲はそれ以外にも山のようにある。しかしその多くは『試しにやってみよう』という程度のことさえも許されないほ

どアマチュアにとつては難しい。それらの曲は名演奏家たちの演奏を楽しむことで我慢するしかないのである。

それは、里山登山を楽しんでいる中高年が、穂高や槍ヶ岳とか、写真でしか見たことのないマッターホルンや、キリマンジャロや、エベレストに『いつか登ってみたい』と夢想するようなものである。彼らにも大山や石鎚山なら挑戦する機会はあるかもし

れない。

しかし石山家の棚には触れてみることもさえ出来な
い高嶺の花のような名曲たちの楽譜も見事に揃えら
れている。もちろん四重奏曲だけでなく、二重奏曲、
三重奏曲から八重奏曲にいたるまで、およそ弦楽器
を含む室内楽で無いものはないというほどである。

口直しにと弾き始めた《皇帝》は、間違えたり個
人的に弾けないところを飛ばしたりしながらもおし

まいまでなんとか通すことが出来た。所々では快いハーモニ―も聞かれたし、有名な第二楽章ではみんな気持ちよくテーマを歌うことが出来た。

「おつかれさま」

「ありがとうございます」

「じゃ、食事にしましょうか」

この日も午後から一回の小休止をはさんだだけで、

ほとんどぶつ通しで五時間以上弾いた。いつもこの集まりではそうである。

いま彼らはベートーベンの初期の弦楽四重奏曲といわれる第四番を練習している。この日はその第三楽章と第四楽章を中心に練習した。この二つの楽章だけで最初の四時間くらいが費やされた。この曲を練習するのはこの日が初めてではない。何年か前に一度取り組んでいるし、今回もひと月まえからやつ

ている。アマチュアにとっては、このような本格的な曲が、『仕上がる』ということはないのかも知れない。しかし彼らにとってはその一回一回の練習が楽しいのである。面白いのである。

その練習では、音程合わせは避けて通れない。それは地味で根気の要る練習である。

「あのだいだい色の表紙のカルテットの何とかっていう本に『アマチュアが出している音の八十パーセ

ントは濁っている』って書いてあったでしょ。せめて五十パーセントにしようよ」

と石山夫人がいうと、

「五十パーセントなんてとんでもない。七十五パーセントまでいければ御の字だよ」

と石山氏が切り返す。確かに、石山夫人個人にとつて五十パーセントは可能な数字でも、残りの三人の可能な数字や、ましてや四人そろって達成できる数

字となると、七十五パーセントでも相当の努力を要するかも知れない。音程は一度よくなってもちよつと油断するとすぐ甘くなる。それでも努力はしないよりしたほうがいいに決まっている。

四人ともが難しいフレーズではゴチャゴチャになる。一人ひとりがきちんと弾けない場合が多いのだからある程度の妥協は仕方がない。しかしみんなが弾けるようなところでもそろわないことがよくある。

『これくらいはちゃんと合わそうよ』ということになるのである。

もちろん音程やタイミングを合わせることが最終的な目的ではない。作曲家が意図した音楽の表現こそが本来の目的である。練習によって音楽的に表現できる部分が増えていくと、アンサンブルの喜びはどんどん大きくなっていく。

充実した練習の後の食事は格別である。石山家も
鎚田家も子供たちはそれぞれ独立して、普段は夫婦
だけの二人暮しである。四人でのおしゃべりに花を
咲かせながらの食事はまた大いに食も進む。

そうしたおしゃべりはあらゆることに飛び火しな
がらとどまるところを知らない。最近した旅行のこ
と、食べ物のこと、それぞれの昔話。知人のはなし
などがまるで話題のしりとりのように続く。しかし

やはり音楽の話がいちばん多い。それもその日の練習の内容に話が及ぶと、みんなのテンションは一段と上がる。この日も石山夫人がスコアを持ち出してきて、

「ほら、ここはこういう風になっているから、みんなはチェロの刻みに合わすといいんですよ」

「その通りだね」

といいながら、今度は石山氏がスコアを自分の方に

引き寄せて別のページを開く。

「ファースト以外の三人でジャン、ジャン、ジャンとやるところ・・・ほらここんとところ、」

といいながらスコアのその部分を指しながら、

「もう少しきちんと合わせたほうがいいね。それにみんなの音程が決まるともつと良い響きになるはずだよ。音程が合えば無理しなくても音も大きくなりますよ。そうするとファースト・ヴァイオリンさん

がそれに答えるように三人合わさつたよりもさらに強い意志を持った音で答える気になるんだよね」

「その気にならなくてすみません」

石山夫人が冗談ぽく答える。

「そこんとこ、音程は私の責任です。重音がきちん
ととれてないから」

鎚田夫人が左手の形をしながら弁解する。

「いやいや、私もオクターブの重音がなかなか合わ

ないんですよ」
と石山氏も白状する。

さつきまでの練習に舞い戻ったような議論が続く。
しかしこれは決して厳しくも辛くもない、楽しい会
話なのである。

とはいっても練習においても、意見が合うときば
かりではない。結論が持ち越しになることや、多数
意見に押されて誰かが我慢することもある。でもこ

のグループでは不思議と不満が募ることはない。お互いの信頼と尊敬があるからだろう。

話はさらに続く。

「さつきどこだったかポン、ポンと四分音符を弾くところで、ファーストのメロディを充分に意識しながら弾くようにしたんだけど、それが上手くいくと気持ちがいいんだよね。何気なく弾いているときにはぜんぜん味わえない、ただ単純に四分音符で頭を

打つだけなのにあれは一種の快感ですね。いかにもみんなですべて一つの音楽をやっているという実感がありますからね」

と鎚田氏が満面の笑みで、いかにも満足そうにいうと。

「それこそカルテットの醍醐味ですよ」

と石山氏が付け加える。みんな、今日自分が経験したいろいろな場面を思い浮かべながら頷いている。

彼らは、この六年間およそ二週間に一度のペースで集まっているのだが練習時間も、食事のときのおしゃべりも尽きることを知らない。知らないうちに時が過ぎ、日付が変わりそうな時間に気づいてやっとお開きになる。

次の練習での再会を約して別れた後も、二組の夫婦はそれぞれ充実した楽しい時間を過ごした満足感にしばらくは浸された気分である。それぞれ食事の

後片付けをしたり、一時間あまりのドライブで家に帰り着き、冬には冷え切った家に、夏には締め切つてムツとする家に入つたりしてからようやく、午後からの長い時間の疲れを感じるのであつた。

満足感に浸されるときばかりではない。食事やおしゃべりは楽しく過ごしても、夫婦だけになると車で家に着くまで無言のときもある。練習していったはずなのに、まったく上手く弾けなかつた不甲斐な

さを噛み締めての帰宅である。

でも日が経つとまたカルテットがしたくなりだして、自然に楽器を取り出して次の練習会に備えて練習を始めるのである。

六年前に地元で行われたプロの音楽家のためのセミナーに、両夫婦とも期間中ずっと聴講に通ったのがきっかけで親しくなり、たまたま四人の楽器の組

み合わせが弦楽四重奏になるといふので、一気に意気投合して始まったカルテットである。もちろんそれが出来るのはともにリタイア組みで、時間を自由に使える身分の有難さである。

山好きの鎚田氏の提案で『カルテット石鎚』と洒落たつもりで名前も付けたが、発表会などを殆どしないのでその名前を使うことはあまりない。

四人それぞれに長いアマチュアの音楽人生があり、

それぞれの場所で市民オーケストラやアンサンブルを楽しんできた。それは過去形ではなく現在進行形でもある。しかしこのカルテットが彼らにとって特別なものとなつたのは、時間的、技術的な条件がそろつていたということもあるが、何よりもまったくの同世代どうしであり、それぞれがこよなく音楽を愛してきた者同士だったからだ。四人ともが自分たちの音楽人生で最良のアンサンブル仲間に出会った

と直感したのである。

四人がこれまでに蓄えてきた音楽的な知識やセンスは、彼らの腕前を遥かに超えている。聞き知っている素晴らしい音楽を、自らの手で音にしたいという思いが、アンバランスに肥大しているのである。カルテットの楽しみに取り付かれたアマチュアたちはみんなそんなものである。

彼らもそんなアマチュアの一つにすぎないが、取

り組む姿勢は、ある程度練習が仕上がってくるとプロのカルテット奏者のレッスンを受けるという真剣なものなのである。

彼らはいろいろな曲を弾くが、中心はベートーベンの弦楽四重奏曲にしようかと初めに申し合わせて、それをずっと実行している。いまベートーベンの練習は、全十七曲を一通り終わって二巡目にはいつている。

ベートーベンの十七曲は弦楽四重奏のバイブルと呼ばれ、どの曲をとつても音楽的な内容が濃いので何度取り組んでも飽きることはない。

その後、ささやかな発表会を行ったり、四人そろって室内楽セミナーに参加したりしながらカルテットは続いた。セミナー参加は二度あるが、一度目のとき、若い参加者が殆どのなかで、メンバーの平

均年齢七十・五才というのが主催者を驚かせた。そして二度目のときは、平均年齢が七十五才になっていたがベートーベンの中期の傑作を力強く弾いて関係者の賞賛の的となったのである。このときには地元メディアが『心にとどく三百才のアンサンブル』として記事にした。記事には、『高齢で続けているからすごいとうのではなく、アマチュアとして誠実に音楽の感動を追い求めていることに頭が下がる』と

いう取材記者のコメントが添えられた。

練習会は続いた。

鎚田夫妻は、すでにこのカルテット以外の活動はやめていたので、この集まりが彼らの音楽生活の中で唯一の大きな存在となっていた。それは石山夫妻にとっても似たようなものであった。

そして彼らの集まる頻度はだいぶ減ってきていた。

鎚田氏が車の運転をやめたため、電車とバスを乗り継いで石山家まで通うことになったことが主な理由である。このころは多くてもひと月に一度、場合によつてはそれ以上あいただが開くこともあつた。

鎚田氏が運転をやめたのは、運転中にヒヤリとすることが多くなつたので、事故を起こす前にと考えることであつた。鎚田氏は八十才になつていた。鎚田夫人は夫よりも五才若いがもともと運転免許を

持っていない。

実は鎚田氏にはもう一つ密かに悩んでいることがあつた。それは、カルテットの練習中、テンポの感覚がしばしば失われてしまふのだ。若いときでもそういうことによるミスはあつたし、もちろん年に関係なく誰にでもたまにはあることだが、鎚田氏の場合にはたびたび起きるようになっていたのである。

「どうも集中力が鈍つた」

と鎚田氏は苦笑するが、心中は穏やかでなかった。単なる不注意によるミスでないことを一番わかっているのは本人だったからである。

しかしそれは毎回必ずというわけではなく、日によつては殆ど起きないこともあつたので、みんなはそれほど気にはしなかつた。しかし鎚田氏以外の三人もなんとなく鎚田氏の状態に何か問題があることをうすうす感じ始めていた。

しかし鎚田氏に限らず三人それぞれに以前に比べてうまく行かないところは多々あるので、みな『年には勝てない』といいながら、相変わらず全体としては楽しくやっていた。

それは、寒波の襲来で冷え込みの酷い冬のある練習会で起きた。

とにかくその日もいつものように練習が進んでい

た。四人ともそれなりに指の回りも反応も鈍くなつていたが、それでも音楽することの楽しみの大きさが損なわれるようなことはなかつた。

いま彼らを取り組んでいるのはベートーベンの弦楽四重奏曲第十六番であつた。病苦に悩まされていたベートーベンの最後の作品である。もちろんこのときの彼の耳は全く聞こえない。にもかかわらず偉大な精神の持ち主であつたベートーベンは、この作

品でも力強さと明るさと深い感動に満ちた音楽を作り上げたのである。『カルテット石鎚』にとつてもベートーベン全曲演奏二巡目の最後の一曲への取り組みであつた。

この曲を弾くに当たつては、意のままにならない速くて難しいところも多くあるが、そういうところはともかくとして、彼らは『非常に遅く、静けさを以つて歌う』と指定された第三楽章を特に好んで弾

いた。何度弾いてもこの楽章からは深い感動を受けるのだった。

この日は第十六番を練習し始めてから何度目かの集まりだったが、例によつて第一楽章から始めた。続く第二楽章は非常に速く弾くように指定されていくが彼らは、その指定に全く縛られることなく非常に落ち着いたテンポで弾いた。

そしてお気に入りの第三楽章。この楽章だけは気

に入らないところを何度もやり直しながら進んだ。

この日は特に音程のチェツクをした。フラットが五つも付く調性は、アマチュアにとっては音程合わせも大変なのである。入念に問題箇所を練習してから、楽章全体を通すことになった。

ビオラの石山氏が一人でFの音を弾き始める。三拍遅れてセカンド・ヴァイオリンの鎚田夫人が三度上のAフラットで入ってくる。短三度の二和音が鳴

つても調性ははつきりしない。さらに三拍遅れでファースト・ヴァイオリンの石山夫人がDフラットで出てくる。これでこの楽章の調性、変ニ長調が確定する。さらに三拍遅れてチェロの鎚田氏が最も低いDフラットをオクターブの重音で加わり、ここでみんなはややクレッシェンドして、主題を迎える準備を整える。

『優しい音で』と指定されたゆっくりとした主題を

石山夫人が静かに弾き始める。他の三人は音量を落として石山夫人の弾く主題を支えるようにゆっくりと和音を鳴らしてゆく。

この主題はなんと崇高な気分を呼び覚ますことだろう。階名で読むとただド・シ・ラ・ソ・ラ・シ・ド・レ・ミ・レというだけの狭い音域での音階の順次進行によるもので、一つ一つの音はすべて一拍ずつ進みこれといったリズムの変化もない。このような

シンプルな音の並びが、ベートーベンの手にかかる
とどうしてこんなに崇高な音楽になるのか本当に不
思議である。

四人はその響きに包まれながらゆったりとしたう
ねりに身を任せるように弾き進む。やがて『さらに
遅く』の指定で音楽は、ピアノで息絶えそう
に途切れとぎれの旋律を奏でる。全員がこの部分全
体をまったく同じリズムで進む。ここはCDなどで

聞いていても涙が出そうになる感動的なところだが、こうして弾いている彼らも、鳥肌が立つような感動を覚えながら演奏を続けているのだ。

そのあと前の二つの部分の変奏が続いて音楽は崇高な祈りのように静かに終わる。この楽章は、たった五十四小節しかないのに八分近くかかる。音が消えてからもしばらく沈黙が続いた。カルテットをするものにとって至福のときである。

彼らが余韻からわれに帰って最終の第四楽章を始めようとしたときだった。コトンと何かが床に落ちる音がした。見ると鎚田氏が弓を落としたのだ。そして彼はチェロを自分のそばに置くような仕草をしているが上手く出来ないのか椅子から膝をつくような格好でスローモーションのように崩れ落ちると自分の楽器の上に覆いかぶさる形で倒れてしまった。すぐにみんなに抱えられて床に寝かされた。みんなて

んでに鎚田氏を呼び覚ますように声をかけたが、鎚田氏は微かに口を動かしたがそのまま目を閉じてしまった。少し口を開いて意思がまったく無くなったような表情をしている。石山夫人が電話に走った。

鎚田氏は救急車で病院に運ばれた。脳梗塞であった。処置が早かったため幸いに一命をとりとめた。さらに幸運なことに、若干言葉が不自由になった以外、これといった後遺症もなく一か月後には少しだ

がチェロを弾くまでに回復したが、無理はしない方がよいということ、カルテットはこれを機に『一旦終わろう』ということになった。『一旦』とは微妙な表現だったが、事実上は『終わり』を意味していた。

およそ十年前、すでに夫たちは七十才、妻たちは六十五才だった。『弾ける間に、出来るだけいっぱい弾こう』を合言葉にカルテットは始まった。だから

みんなの頭の中にはいつかこの日が来ることはわかっていたし、最近ではいつ幕引きするかが話に出ることともあった。しかしそれが現実になると、まだまだ弾き足りない感じがして、喪失感は予想以上に大きかった。

その後も四人は、天気の良い日などたまに訪問しあつて、その後それぞれが楽しんでいることや音楽

のことなどを、以前と同じように熱く語り合っただった。

しかしなんといつても最近の最も大きな話題は鎚田氏の、『カルテットの風景』と題した小文が地元新聞社の短編文学賞に入選したことである。鎚田氏は言葉の不自由さを乗り越えながら小説を書き始めていたのである。

『カルテットの風景』は、四人がモデルである

ことは明らかなため、議論が沸騰して、批評は良否相半ばというところであつた。

(完)

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

カルテットのある風景

2022年9月30日初版発行

著者:山中與隆

編集:山中伶子

表紙素材元:www.photo-ac.com

・タイトル:シックな1DKの

居室 008(縦位置)

作者:みのっし~さん

写真のID:23702814

・タイトル:神々しいバイオリンと、

観葉植物

作者:ざあぼん@さん

写真のID:24204094

表紙楽譜画像素材元:IMSLP

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
